

2004年12月24日

人間科学学術院
研究科委員長殿

出口雅敏氏博士学位申請論文審査報告書

下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受けて出口雅敏氏の学位申請論文を審査してきましたが、2004年12月21日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

1. 申請者氏名 出口 雅敏

2. 論文題名 現代フランス社会における伝統文化のリバイバル
副題 ラングドック地方の事例をめぐって

3. 本文

1) 本論文の構成：現代フランスにおける伝統文化の変容を、南仏ラングドック地方に特徴的な祝祭とそれを取り巻く社会的・文化的・歴史的・地政学的環境から解析した本論文は、申請者が南仏モンペリエ大学の大学院（民族学専攻）に留学していた数年間に行った実地調査と文献渉猟に基づくものである。すでに申請者は同大学院に本論文の骨子となる修士論文を提出して高い評価を受け、修士号（主査：同大学主任教授ジョスリヌ・ボネ）を授与されているが、本論文ではその後の研究成果を加味して、全体的な加筆・修正を施している。

本論文は、「序章」、「第I章 ラングドック地方の伝統的祝祭とそのリバイバル」、「第II章 陸の祭りの変容」、「第III章 海の祭りの変容」、「終章」から構成されている。

まず、論文全体の問題意識を開陳する序章において、申請者は地元民から《トーテム動物祭》とよばれる祝祭に、一度消滅して近年復興した事例が少なからずあることに着目し、このリバイバル現象を単に本質主義的な民俗文化を語る言説に逼塞させてしまう危険性を指摘するとともに、現代社会における「伝統的」祝祭の意義やそのリバイバル因、トーテム動物という固有のシンボルの社会的用途に対する考察を言挙げする。そして、そのための手法として、祝祭の象徴性と社会性との関係およびコミュニティの内部関係（intra-relation）と外部関係（inter-relation）にも着目することの必要性をも指摘する。

こうした問題提起を引き受けるため、第I章では伝統的なトーテム動物祭の今日を、自

ら調査したジニャック（ロバ）とペズナス（仔馬）の事例から説き明かす。次いで、これら先行する伝統的な動物祭を追って再生されたさまざまな動物祭を取りあげ、これらの祝祭に登場する動物張りぼての形状や所作、伝承による意味づけなどに共通するものがあると指摘する。と同時に、申請者はこうした再生現象のうちに、当該市町村の住民たちが、そのトーテム動物（祭）をローカル・アイデンティティや統合シンボルとして対象・自覚化しようとする、きわめて重要な契機をみてとる。

第 II 章では、モンペリエ約 30 キロメートル南方、貝養殖で知られるトー潟湖岸のメーズで伝統的に営まれている牛の動物祭を詳述している。ここで申請者は、古代から現代に至るまでのこの町の歴史や現代における変容——文化行政や観光化、エコロジー基地化などを統計を用いながら紹介し、そのあとで、この動物祭の起源伝承を掘り起こし、その農耕的・漁労的な特徴を析出して、これが動物祭の起源のみならず、じつは町の起源をも語る伝承であり、さらに農民と漁民とからなる《複合コミュニティ》としての町の伝統的なありようをも示すものと指摘する。

だが、この章の圧巻は、町に残るオック語による「牛」の民謡を再録し、近隣市町村のトーテム動物に対するメーズの牛の優越性を唱えるその歌詞が、近隣町村との間の緊張・対立関係を暗示しているとして、その実情を古文書から裏打ちしているところにある。つまり、そこでは「祝祭的力学」（文化的次元）と「社会的力学」（社会経済的次元）がパラレルな関係を結びながら、隣接するコミュニティ間の差異化や対立の図式が示唆されているのではないかと申請者はそう推理する。さらに申請者は、フランスの社会学者であるデュマズディエや民族学者のポワリエ、ベルギーの民族学者メニルらの祝祭論に基づきつつ、メーズの動物祭が都市化された《伝統的》な《近代的祝祭》だとする一方、近代史家のマンドラやシャパ＝ウィルトネの所論を批判的に援用し、こうした祝祭が《内に見せる》のでありながら、同時に《外に見せる》という要素を帯びることで、分断ないし解体した伝統的コミュニティの一体性を、象徴的に顕在化しているともする。とすれば、トーテム動物祭のリバイバル現象とは、都市化や観光化の波に洗われてそのアイデンティティを喪失しつつある農村社会の危機を超克する契機として、《農村再生》の契機としてあるのではないかと申請者のこの指摘はまことに鋭い。

第 III 章では、申請者は新たな研究テーマである《文化遺産》の問題を、同じメーズの漁師祭と町当局主導の「遺産の日」から検討している。かつて「陸の民」（農民）との対比で負性を担わされていた漁民たちは、漁師祭のみならず、「遺産の日」の行事にも参加するようになってきている。申請者はそこに「漁民祭や漁師自体のイメージを高めようとしていた町当局が、漁師集団をメーズの文化遺産としてフォークロア化（民俗化）した」と推測する。なぜか。申請者はその背景を、牡蠣やムール貝を中心とする貝養殖場の定着・拡大を目指して成功したトー潟湖開発にみる。つまり、当局は、町の経済的発展を支える彼らの生業をこうして文化遺産として記号化し、その具体的な表象として、漁民たちを負性の歴史から切り離し、「コミュニティ・アイデンティティや文化遺産の精華として、メーズの生活の

前面に」立たせるようになった、というのである。

以上の論述をまとめた終章において、申請者はじつに重要な指摘を再確認している。まず、今日、《伝統的》な近代的祝祭はその象徴的意味を（部分的に）《脱＝意味化》され、スペクタクル化されている。申請者はこうした祝祭のありようを、「見させる、信じさせる、集団を存在せしめる」《民俗化された祝祭》と呼び、そこに《伝統的》という名の集団の過去ないし集団的記憶との関係をもっている。さらに、農村世界における祝祭のリバイバル現象が農村コミュニティの解体、すなわちその《文化的自律性の終焉》と《絶対的都市支配の完成》という状況下でなされているとするのだ。こうして申請者は、今日のコミュニティ相互間の集団的対立が、かつてのような社会的な場ではなく、ますますその傾向が増幅している文化的・象徴的な祝祭の場で、明確に現れていると指摘する。「伝統主義の誕生」とは、エリック・ヴェイユが言うように、伝統的文化の桎梏とは無縁なすぐれて都市的かつ主体的ないし自立的な主体の誕生を意味するが、農村生活者もまた、1960年代以降、都市的生活の圏域で、そして都市生活者の眼差しで地元の農村文化が有する伝統や祝祭を再評価し、再活性化していった。本論文の主題はまさにこの言説のうちに収斂していく。

2) 本論文の評価：

以上、縷々検討してきたことから明らかなように、丹念な現地調査の資料を基軸とし、民族学（文化人類学）や社会学などのさまざまな先行研究を批判的に継承しつつ構成された本論文は、まことに闊達な祝祭論としてあるだけでなく、地域研究や社会変動論、あるいはコミュニティ論や文化研究としても見事な成果といえる。加えて、問題を提起し、それをひとつひとつ説いていくという周到にして切れ味のよい論述は、単なる記述や独創的などという贅辞を越えて、時に迫力すら感じさせる。また、自らの理論構築のため、新たな概念や仮説を次々と提出する学問的姿勢も高く評価できる。たしかに、南仏の特定の地域での事例研究からの考察が、題名にある「現代フランス社会における伝統文化」に対し、はたしてどこまで普遍化できるか、これからのさらなる調査研究を待たなければならないが、本論文で過不足なく披瀝された申請者の知見と洞察力は、その学問の充実さと今後の大成を大いに期待させるものといえる。

以上のことからして、下記審査委員会は本論文が博士（人間科学）の学位を授与するに十分な学問的価値を有するものと判断する。

4. 出口 雅敏氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学教授	博士（人間科学）早稲田大学	蔵持	不三也
審査員	早稲田大学教授	学術博士（筑波大学）	寒川	恒夫
審査員	早稲田大学名誉教授	文学博士（早稲田大学）	濱口	晴彦